



(中編続き)

2か月程前、ほんの短い瞬間

「そういえば、立花隆をしばらく見ないなあ。どうしてどのメディアも彼をフォローしないのだろう」

と何の前触れもなくふと、そう思いましたが、先月訃報に接し、その後ついこのあいだ、テレビで4月の末に亡くなられた「知の巨人」(で且つ科学的実験者及び行為者…括弧内筆者付加)と称される立花隆についての特集を見ました(矢張フォローしているチームがいたのです)

今から10年程前の生前の映像がずいぶん流れたのですが、著名人にありがちな「作り」がありませんでした。表情も変に穏やかでもなく、敢えての険しさもなく、ありふれた普通のそれ。

それらの映像の中で、お名前は存じませんが、恐らく「相当のレベルの権威」と思われる「長年の友人である老人」と話している映像がありました。

場所は、その方の庭先。

立花隆が尋ね、その方が答える。すると立花隆は「ふーむ。なるほど」という顔になる。

変なへりくだりもなしに、唯々「なるほど」という顔をしている。

相手の方も権威であるにもかかわらず「どや顔」が全くない。

こうした場面によくありがちなお互いがお互いを牽制しあうこともなく、背伸びの仕合っこともない。地に足がしっかりと着いている。

或いは、その反対に権威の方が尋ね、立花隆がぼそぼそと答えるのですが、その場合も前述同様、牽制もどや顔もないのです。

お互いがお互いに「へえ」と「成程」と「なんで?」だけ。

お互いに変くつろいで話しているのが分かりました。

そうして、その時の会話に使われている立花隆の英語は発音も悪く決して上手いものでは

ありませんでした。

しかし話の中身が濃く、受け答えに誠実さとお互いへの興味が深々と感じられました。

30年ぶりに再会したのに、まるで昨日話した話の続きであるかのように話に直ぐはいれたと後日その方がおっしゃっていたとのナレーションが入りました。

その話を聞くにつけ中身がないのに形だけ整える事のあほらしさ。

まずは中身を持つ教育。

次にそれを整理する教育。

そしてそれを相手に伝える教育。

中身がなく形だけ整っている礼儀無き行儀良さは、巧言令色少なき仁又は慇懃無礼にしかありません。

話す英語は完璧なまでに正しいのに、聞く気にもならない話をされたら、恐らくこのお二人は、その場では何も言わないでしょうが、二度とその庭先にその人を呼ぶことはないような気が致しました。

最近我が国では、英語教育同様にプレゼンテーションノウハウやスキルアップの向上に関する教育は、そこまでやるかというほど事細かにされているようなのですが、肝心かなめのプレゼンテーションの中身の教育となると「お寂しい限り」のような気も致します。

なぜこのようなことになってしまっているのか？ Why does it happen?  
引き続き考えていきたいと思っております。

(追記)

最後に立花隆さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。